縄文土器製作の転機

―松原遺跡前期末葉～中期初頭土器の底部から―

徳永　哲秀

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　新展開を画した下島式期
Ⅲ　おわりに

Ⅰ　はじめに

信州新町お供平遺跡の土器を中心に、中部高地・主として千曲川流域の早期前葉から縄文前期（諸磯ｂ式期まで）の土器底部を観察した結果、次のような土器製作に関する見解を得たことを別稿で報告した。

①尖底土器は、底部に観られる痕跡から穴設置によって製作された可能性が高い。

②平底土器の底部及び胴下部の痕跡の様相からみて、穴設置による土器製作が諸磯ｂ式期にまで及んでいるのではないかと推定される。

③痕跡から想定できる平設置による土器製作技法は多様で、その平設置への移行には地域差がある。

④土器製作技法が穴設置から平設置に変わるのに伴い、土器の形状・文様にも変化が現れている。

以上の見解のうち、特に③④についてさらに検証を深めることを目指し、千曲川流域の土器製作において平設置が本格化するものと思われる前期末葉（下島式期）以降の底部の様相を、長野市松原遺跡（前期末葉～中期初頭）の土器に観ることにした。その底部観察の結果と、推定される平底土器の施文技法を含む土器製作技法・その技法と土器の形状・文様・使用法の変遷等との関連についてここに提示しておきたい。

Ⅱ　新展開を画した下島式期

(1)　観察対象とした土器

底部の様相ができるだけ明瞭に観られるとともに、土器の形状や文様との関係が考察できる資料に限定した。今回観察したのは、下島式土器に相当するとされる資料９点（図１）、晴ヶ峰式土器に相当するとされる資料１点・中期初頭土器群とされる資料10点（図３）である。

(2)　観察の視点

観察にあたって、まず残存状態の極めてよい１点について詳細に観察し、視点をはっきりさせることにした。その資料として、上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４　松原遺跡・縄文時代　第209図285（図１－５）（上田1998）を選んだ。

・底面の形状―底部中央部にわずかに凹みがあり、平面上に設置した場合リンク状に周辺部だ

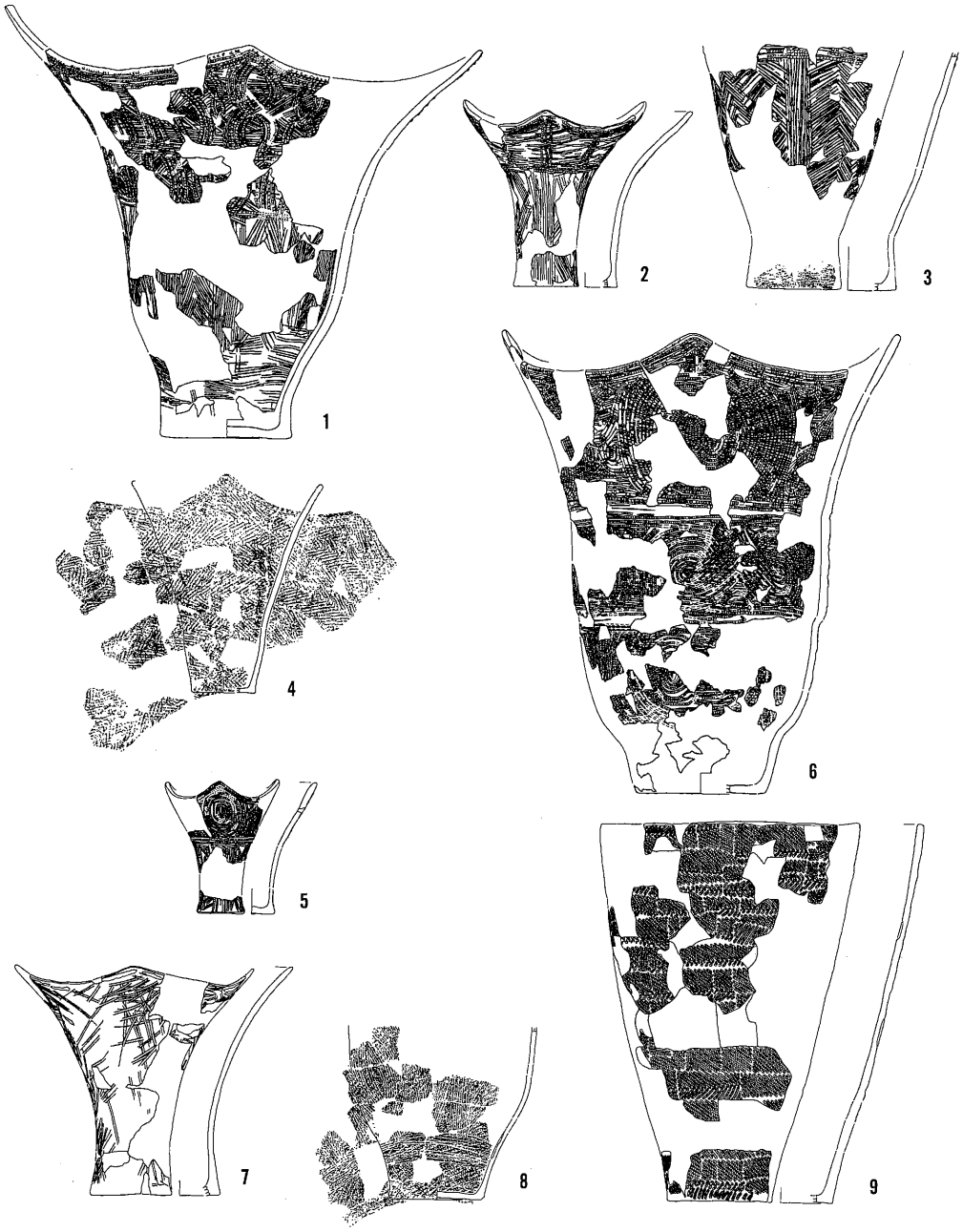

図1

けが接着し中央部は接着しない。(→「リンク状平板面を持つ」と表現する。)

・底面の状態―リンク状の周辺部は滑らかで、指先で触るとつるつるとしている。中央部はほぼ平板だがいくぶん凹凸があり、ざらついている。底部全面に光沢が観られるが磨き痕跡は確認できない。→(「リンク状平板面平滑・中央部わずか凹凸あり」・「底部全面に光沢」)

・胴最下部の様相―粘土を底部から折り返して盛り上げたようなふくらみがある。結節浮線文・平行沈線文はいずれもそのふくらみの上にまで施され底部きりきりに及んでいる。→（「ふくらみあり」・「文様は底部きりきりまで及ぶ」）
・底部の痕跡―数本のすじ状の痕跡が観られるが、何によるものか判定できない。（→「不明痕跡あり」）
・底部圧痕―網代など下敷きを用いた結果生じた圧痕は見受けられない。（→「圧痕なし」）
・その他―結節浮線文の凸部や口端部など全面に及ぶ光沢が観られる。その光沢の様相は底部の光沢と類似する。

以上の観察視点によって各土器資料の観察を行った。

(3)　観察結果と考察

①下島式土器に相当するもの

底面は、周縁部を部分的に残すだけで確認できないものと後述する８以外はいずれもリンク状平板面を持つ。その状態は大型の２と６を除き平滑である。リンク部にあたる周縁部だけを残すものも平滑平板な底部様相を見せている。中央部の凹み程度は大型の２と６では大きいし凹凸もはげしいが、他のものは代表例の５と同様にわずかに凹み、底面の状態もわずかに凹凸を持つ程度である。

大型の１の底部は、リンク状の周縁部と中央部が分離破損している。はっきり周縁部だけが残存する事例は、後述するように五領ヶ台式期に多くみられるが、この土器群にはみられない。

胴最下部には、いずれも底部に由来すると思われるふくらみがみられる。６のふくらみは小さく目立たない。６・７の２点以外は、そのふくらみの上にも施文され、文様が底部きりきりにまで及んでいる。

底部に観られる明瞭な痕跡はない。１と５には何によるものか不明なわずかな痕跡が認められる。

松原遺跡では、有尾式期に底部圧痕が観られることは報告されている。（1998贄田）この事例については前述した別稿でもとりあげている。しかし下島式期の松原遺跡の底部圧痕は確認されていなかった。今回の観察で図２に示す圧痕が確認された。

考察１　底部成形技法の定型化

お供平遺跡の諸磯ｂ式期までの底部様相から推定できる土器底部の成形は、穴設置における手びねりによる成形も継承して多様であった。しかし松原遺跡の下島式とされる一群の土器は、上記のようにその共通した底部の様相からみて最初から平板な台の上で底部成形作業を行ったのではないかと思われる。いわゆる平設置の本格化といえよう。この下島式の土器底部の様相は、県内外の遺跡でも、全く同じであることから広範な画一性が予想される。

まず円盤状の底部を作り、その周縁上に粘土紐を輪状に乗せる。その粘土紐を底部に押しつけて分離することのないようにしながら圧延成形してゆくが、その際底部の粘土を胴最下部に折り返して張り付ける。このような底部の分離をふせぐ作業によって底部の周縁部がリンク状に下部に押し出されて作業台に密着する。その結果、底部にリンク状の平板面ができる。一方

中央部は浮いた状態になり作業台に密着しないので平板になりにくい。

なお最初に作った円盤状の底部周縁部はこの作業によって薄くなりやすく、上記大型土器1の場合のようにリング状の周縁部と中央部が分離破損することがある。この傾向の時代・形式・地域による差異については、あらためて取り上げたい。

考察2　施文と器形に観られる変化と土器製作技法

諸磯b式期と異なり、下島式期のこの一群の土器では縦に構成された文様の半裁竹管による結節浮線文や平行沈線が底部きりきりにまで及んでいることは注目される。特に結節浮線文の施文技法は特異である。底部に向かって垂下するとき常に上から下に向かって施文している。

そのために行われる手作業は、当然半裁竹管を下から上に突くかたちをとる。この作業を地面ないし低い台上に置いた土器に行うことはできない。土器を手に持って施文するか、下から施文具を突き上げることのできる一定の高い台上に土器を設置して施文しなければならない。そうすれば、底部きりきりに及ぶ結節浮線文や平行沈線の施文は可能になる。

高い台上で作業をしたか、手に持って作業をしたかという点については、施文後の文様を損なわないためには台上に置いたと考えられるし、大型の胴最下部に及ぶ平行沈線文を持つ1や結節浮線文を持つ6は手に持ったり抱えての施文は難しかろうと考えられる。

また、高い台上に土器を乗せることは土器の使用方法とも関係があったのではないだろうか。地文とはいえない文様が胴最下部に及ぶのは、その文様が自然に見られる状態に土器が置かれていたことをも暗示しているであろう。

大きく縄文前期の千曲川流域の土器変遷を考えたとき、尖底土器がその使用法とも関連して穴設置によって製作されていた段階から、平底化・平設置製作に変化することは使用方法の変化でもあったはずだと思う。お供平遺跡にみられるように（別稿）、神ノ木式・有尾式・諸磯a式・諸磯b式としだいに穴設置の影響が失われてゆくと共に、器形も変化している。傾向として、頸部から口縁部にかけて形状も文様も強調されるようになる。形状面では、口縁部が大きく開いてゆく。文様は、その形状に合わせて頸部から上に展開されるが、尖底土器以来の横帯構成を基本とする。そこに現れた具体的な使用法の変化は、推測しきれないが、煮炊きという実用性が最優先された尖底土器から、置かれていることに意味がある土器に変質変貌していったことをもの語っているように思える。

穴に設置して回転しながら作る土器は、すべて実用・実利を優先する合理主義に依っていた。そこに加えられる文様も回転製作技法のままに、土器に向かって左から右に施文具を回転して施す横帯施文を基本としていた。上記のように変貌してきた土器は、平設置による回転を伴わない成形・施文を次第に主体化した。

その点で下島式土器は、諸磯b式期からさらに変貌する。縦方向に構成された文様も含む発達した結節浮線文は、高い台上に設置し静止した土器に対し正面から長時間かけて施される。細い粘土紐を張り付けては半裁竹管で結節を刻む。底部きりきりまで文様が施されるが、その胴最下部が開く形状も新しい。いずれも、台上に設置して用いられるという用途につながるものといえよう。なお、ここで本格的に登場した張り付け技法はあらためて述べるように土器製

作技法を大きく変えていった。

1と6の2点の大型土器にみられる胴下部の外湾する屈曲は、穴設置の名残をとどめるものではないかと判断している。

考察3　網代痕の存在

8に観られる網代痕は特異な様相を見せている（図2）。底部中央部では、網代痕が意識的に削り取られたような形跡を示している。用いたのは棒状具のように見受けられる。別稿で取り上げたが、千曲川流域の穴設置から平設置への転換の過程で回転に供する可能性のある下敷きの使用は主体的に行われていない。底部圧痕がおよそ観られない状態は他地域と異なり、中期前葉にかけても継続する。その背後に考察1に述べたように、土器製作技法と土器使用の独自な展開があったといえるだけに、この底部圧痕は注目される。

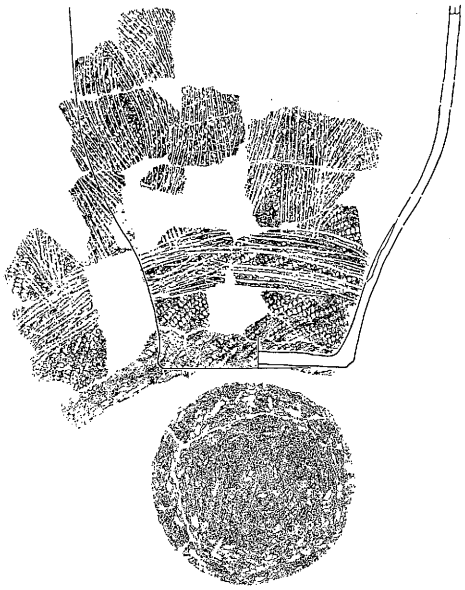

図2

上田氏の類別では、下島式土器に相当するV群土器E類の「併行する他型式の要素が卓越する土器群」に含まれ、そのなかでも諸磯c式土器にきわめて近いものとされている。製作は在地としている。他地域の土器でありながら在地で製作されたものであれば、その土器製作技法に下敷きを用い、生じた圧痕を製作後削り取ったことは、大変興味ある行為といえよう。今後の課題として、諸磯c式土器の底部圧痕のあり方を追ってみる必要があると考えている。

②晴ヶ峯式土器に相当するもの

形状や文様との関連が考察できる土器底部は1点（図3－10）だけであったので、大まかな傾向を捉えることしかできない。底部の周縁部に特別な平板面は認められない。しかし、底部全体が平板面をつくっている。

この底部の様相から平設置であることは当然であるが、底部の成形技法については下島式土器と同じであったとは断定できない。ただ底部が胴部と分離破損しているので、やはり台上で円盤状に底部を作り粘土紐を輪状にして積み上げたのであろう。器壁を3～4㎜と薄くしたため、リンク状平板面ができなかったのだと思われる。

口縁部の突起・細い粘土紐による浮線文の貼付・縄文の地文に乗せた胴最下部にまで施された浮線文、いずれも一定の高さの台上で土器製作作業が行われたことを想定させる。

この土器の製作技法で注目されるのは、きわめて薄い器壁に粘土の張り付けが行われていることである。中期へ展開する土器加飾技法の基本が示されているものと考える。

③中期初頭土器群

10点のうち、13・14の2点を除き底部周縁部にリンク状の平板面を持っている。中央部の凹

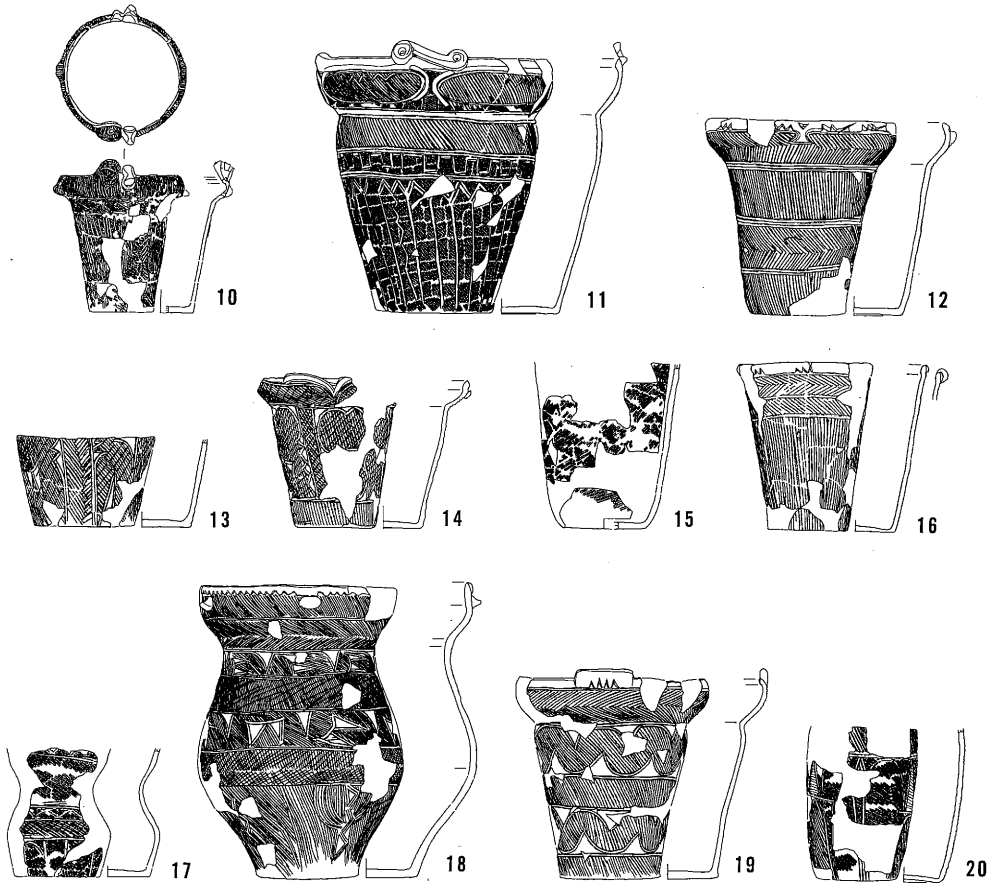

図3

みの程度には差があり、凹みの大きいものほど凹凸が多い傾向がある。11・15・18は平板面に光沢が観られる。磨き痕跡はない。

16の底部は、リンク状の周縁部と中央部が分離破損している。

18・19には、底部に由来すると思われるふくらみがみられる。そのふくらみの上にも施文され、底部きりきりに及んでいる。ほかのすべての土器も、竹管による平行沈線文や半隆起線文が胴最下部から時に底部にくい込むようにほどに施文されている。いずれも上から下に施文具を引いている。

以上の所見から、この中期初頭の土器群の用途およびその用途と密接な関係を持つ製作技法は、下島式土器の上述した新展開を引き継ぐものといえる。すなわち、中期初頭の土器も、用途上一定の高さの台上に置かれることに意味がある土器として、台上に置かれて胴最下部まで構成された文様が施された。その技法は底部の成形から、ますます多用されるようになって行く粘土張り付け技法まで、この後に展開する中期の土器の加飾傾向を推進することになったといえよう。

Ⅲ　おわりに

尖底土器の製作技法を引き継ぎながら次第に本格的な平設置技法が確立されていった。その大きな画期が、下島式期にみられる。それは、千曲川流域ないし中部高地の縄文中期の土器への展開にとって多大な意義をもっていた。

中部高地・千曲川流域で土器回転のための下敷き使用が一般化しなかった経緯、粘土張り付けの具体的な技法、屋代遺跡群の中期初頭土器との関連、さらに土器編年の基本や課題等について併せて緻密な考察を深め、この土器製作の画期をより明確に提示することができなかったことは残念であるが、今後の課題として研鑽に努めたい。

縄文土器の製作技法については、上田典男氏・川崎保氏・寺内隆夫氏・贄田明氏・水沢教子氏・百瀬長秀氏・綿田弘実氏の皆さんに私見をお話しし、助言と励ましを頂きながらここまで続けてきた。青木一男氏は、いよいよ縄文土器と弥生土器の製作技法がつながるねと励ましてくれる。

末筆ながら、皆さんの日頃の励ましに感謝の意を表し、この小論を括りたい。

参考資料

上田典男・贄田明　1998「第５章　第３節　縄文時代前期末葉～中期初頭」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書４　長野市内その２　松原遺跡　縄文時代』長野県埋蔵文化財センター